

9 「床ずれゼロ」の旗印を掲げ

戦国時代、佐竹義宣の家臣・忠野左文は背幟（はいし）に「一足不去（一歩も退かない）忠野左文」と大書して出陣していました。それは自分の剛勇さを誇示するためでなく、皆の前で誓うことによって、敵に後ろを見せないという自戒のためです。

せんえつにも任運荘は「床ずれゼロ」の小旗印を掲げています。いつの間にか旗印を掲げる形になってしまったのです。

終末期の床ずれは予防も治療も難しいという声が、医療関係者からも聞かれます。たしかに、私たちも初めはそうのように考えていました。しかし、いくつかの経験を経て、終末期でも床ずれは予防できるという結論にいたっています。

す。やはり、床ずれは手拔きの介護の結果です。

前節では床ずれの治し方を詳しく述べましたが、今度は終末期の床ずれ予防に難渋した実例を報告します。

Sさん（八七）は脳軟化症と深い腰曲、おむつ使用、重度の介護が必要です。昭和六十一年八月七日、再発作でいよいよ集中看護状態に入ります。

三日目、座骨部に五疔の発赤^{はっしや}ができていたではありませんか。体位変換後たった四十五分間で、しかも真昼の発生です。腰曲のひどいSさんには仰臥位が無理だったのです。まず、圧迫部位を保護するため無圧布団に穴をあけ使用します。

「Sさん！ 向きを変えますよ」。かすかに目をあけて応答してくれます。四人がかりで頭、胸、胴、足とガラス細工のように抱え、他の二人が穴あきマットの位置に正しく発赤保護のための円座、砂袋などの補助具を配置し、その上に寝かせます。口内を巻綿糸でふき、オリーブ油を唇から足の先まで全身くまなく塗りながら発赤の有無を確かめます。

発赤の出来やすい部位を空間にして保護します。足や手はむくみがあるので高めに。

問題は夜。夜勤は二人で不眠の作業です。体位を変える時、一人が頭と胴、一人が腰から下を抱えます。「ううっ」という声に思わず「Sさん！」と呼びます。表情は変わりません。「きつくてごめんね。床ずれになるともっときついからがまんしてね」と励まします。いつも声をかけてあげることが重要です。仙骨、腸骨が穴あきマットに正しく入っているかを、抱えた指先で急ぎ確かめます。

Sさんが重患でも、他の方々の世話を控えるわけにはいきません。朝の引き継ぎまで発赤や水泡ができないよう祈り続けた夜が、やっと明けます。こうして床ずれ防止に成功、初発の発赤も一カ月後の九月八日に完治します。

しかし、脳硬そくの再々発、点滴と酸素吸入を続行。分泌物が口からにじみ出、臭気が急激に部屋を包み始めます。やがて点滴も入らなくなり手足のむくみも甚だしくなる。皮下注射も吸収されず、手足の表皮は今にも破れそうで、

注射針のあとから液が噴き出てきます。骨だけの様相に胸をしめつけられながらも、体位変換は続きます。

十月十一日にはついに、タール状の便になります。緊張状態の看護婦の腕をとって娘さんが訴えます。「もうやめて下さい。こんなにお世話してくださるのを見ているのがつらいんです。看護に不足はありません」。

終末の重態八十五日も耐え続けたSさん、一度も苦しい表情を示さなかったSさん。そのことが看護に全力をあげた寮母、看護婦への慰めであり、報いです。いや、そんなことは小さいことです。終末期でも床ずれ防止は可能であるという最大の贈り物を、死の床から私たちにしてくれたのです。その後、Sさんの志とともに任運莊は歩み続けます。